

天野不爭

郡内の桂村で、音に聞えた分限長者の天野伴造氏の先代は、當主と同じく矢張其名を伴造と呼んで、一家の棟梁として家政を司配する傍ら、風流韻事を嗜んで居たが、惜哉、天年を保つ能はず、明治十九年四月十一日、

朝露の薄う消えけり蓮の花

と云ふ句を辭世として、享年僅に四十七歳にして此の世を去られたので、同村廣徳院へ葬つた、而して俳人としての伴造氏は、其の菩提寺なる廣徳院の住持、大森香芸に従つて俳諧を學んで、俳名を不爭と號し、江戸の月の本爲山・菊守園見外・一具庵蕙香なども風交を結んで居たものだから、是等の三人の如きは春陽三月の花の頃ほひ、あるは子規啼く青葉の頃、または秋風清らかに吹き渡りて稻の香りの芳ばしき頃、さては白雪山野を包みたる冬の寒きにも、折々に杖を曳いて不爭の下を訪ねた、而して菊守園が不爭亭客中歌ひたる

夜こに見る山さまゝや秋の月

鎌留の山荒々し秋の月

と云ふ發句は今も人口に膾炙して居る有名のものである、それで遊杖の士は嘗て是等の三人者のみならず、其名を慕うて來るの俳客、亦は行脚して且過する雲水の徒、常に其の蹤を絶たず、食客三千人の盛無しとするも、また却々に盛なるものであつた、信州の俳人花園の如きは、二十餘年間杖を錫めて、恰も家人の如き状態であつて竟に不爭亭中永眠の床に就たとの事である、而して不爭は早世した爲に、其の作に係る俳句もまた從て僅少である、左に掲ぐる數句を見て、其の全豹を窺ひたまへ。

黄鳥や開けても見たき窓の前

はるまほと不二の低さや消ゆる雪

下駄借て畑の梅見に出掛けり

切紙鳶に念のはなれし海の上

浮世なり花見る人に畑かせき

此思ひかよふか蓮の臺まで

あひる氣て木下廻るや花の雪

戦く葉に輕うとまりし蜻蛉哉

我家のものめかしけり青簾

炭碎く音に眼覺す假寢哉

松風を氣つかふ耳やほとゝきす

はつ霜や夜は殊更に月の照

大森香芸禪師の一週忌に